

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2023年5月 NO.231



[もくじ]

- 2～3 第三十二回高知出版学術賞を審査して…ヨース ジョエル
- 4～5 高知よさこい情報交流館十年の歩み…佐伯泰典
- 6～7 舞台美術というお仕事…水谷雄司
- 8～9 感情がぐちゃぐちゃになっても読むのをやめられないような小説がわたしは好きだ!…山中由貴
- 10 「いのちの電話」とは…橋詰益子
- 11 「アンテナ」咲子おめでとう…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

高知出版学術賞を審査して

ヨース ジョエル

本年は十二点の応募作品があった。例年、推薦の対象は当該年内（奥付の日付による）に発行されたものであるが、二〇二一年度に事業を休止したことから、第三十二回においては、「二〇二一年一月一日から二〇二二年十二月三十一日までの二年間のうちに発行されたもの」としている。

出版学術賞の授与は、実に難しいバランスが求められる。審査委員は推薦される図書を学術性において評価する一方、専門家でない読者の知識向上に貢献できるかという点をも考慮する。つまり、学術性において優れていても、難解な専門用語の多用や膨大な資料の羅列など、一般の読者を近づけない書籍は必ずしも高評価を博せないし、一方、参考文献の明示などがなく読者の知識を一段と高い水準へと持ち上げる工夫が欠如している書籍も、審査委員の評価を得にくい。「啓蒙」という言葉こそ古い、本賞に關していえば、このような傾向は以前より顕著になっているといつてよからう。

本賞が何よりも大切にしたいのは、出版文化という知識の媒体とその役割への自覚と矜持である。インターネットという圧倒的に便利な道具がある二十一世紀においても、専門

的、あるいは一般的な知識欲を満たしたい人は、書籍を手に取りページをめくりながら本を読んでいく。読書という行為は、途絶えることがない。知ろうとして読む、その行為自体が尊く、同時に、重要な社会的機能をも果たしている。それは、執筆・編集・出版という物理的でクリエイティブな過程を通して、それぞれの製作者の顔が見えるようにすること、いわゆる《人間の手による知識の連鎖》の可視化である。書籍は、正確な知識への探求という健全な市民社会の根本的な理念を支える媒体である。

一般読者の好奇心と学者たちの専門知識との接点を見つけることは決して容易なことではない。幸い、一年の空白を後にして、十二点の応募作品の中からこのような書籍を二冊奨励することが出来たのではないかと思う。

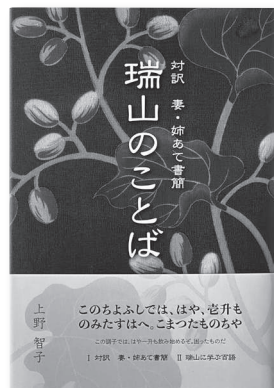
■高知出版学術賞

上野 智子 訳著

『瑞山のことは』

対訳妻・姉あて書簡

(上野智子 刊)



本書は、武市瑞山（半平太）の書簡を現代語訳にし、書簡でふんだんに使われる土佐の言葉百語に解説を加えた著書である。大きく分けて、二つの部分からなっている。Ⅰ（「対訳」）では、原文どおりの文章を上段に、その現代語訳を下段に配置して、武市が一八六二年七月から一八六五年閏五月までの間に記したためた一八五通の書簡が列記されている。Ⅱ（「瑞山に学ぶ百語」）では、主に言語史・方言学の視点から、妻と姉への書簡で頻用される土佐言葉に關する説明がなされている。

フィクションにせよ歴史研究にせよ、幕末明治に關する著書は多い。旧体制の刷新に奔走した人たちの闘達な活躍ぶりは、現代社会に閉塞感

を抱いてしまう大勢の読者を惹きつけてやまない。今もなお数多くの歴史小説の材料とされている。また、近代日本の成立過程を明らかにしよう、虚構や脚色を排して当時の史料をもとに歴史事実の探求に挑む研究も実に豊富である。だが、広く共有されるイメージにフィクションの要素が少なくない人物たちに関する一次資料を、一般読者に直接、しかもわかりやすい形で提供する書物は必ずしも多くない。

幕末明治の人氣は根強いが、影のないストーリーであると言えない。英雄史観、または国家体制の成立が伴った内外の犠牲への無関心だけではない。地域の歴史に即してみた場合、「地域ナショナリズム」という、愛国心に勝るとも劣らない感情を肯定するきらいがある。土佐勤王党も例外ではない。例外どころか、尊王思想を掲げて政敵の暗殺を辞さなかった点では、世界に開かれた将来を夢見たとされる龍馬などより一段とナショナリズムの枠にとどまってしまう危険性ははらんでいる。

本書では、しかし、あくまでも、ことばそのものに重点が置かれている。一次資料をわかりやすく提供しながら、政治思想的な批判あるいは称賛を取り入れない。歴史的解説を極力省略して、現代語訳を付け加えることだけで読者の目の前に、希望や怒りなど様々な感情に打ちひしが

れる人間像を浮かび上がらせる。武市の一八五通の手紙の内容だけに「ものを言わせよう」とする著者の工夫が功を奏したといえる。その主な要因は、おそらく、手紙がほかの武士や仲間にはなく、検閲の目を潜り抜けて妻と姉という、二人の女性に届けられたことである。武士の矜持を語る勇ましい口調の部分もあるが、全体的に穏やかで、平凡な記述が多い。その文言から二十一世紀のわれわれにも共感しやすい人間らしさが伝わってくる。武市の浮き沈みする心境、蚊や蚤の対策、月代や髪の手入れ、下番を味方につける「お酒作戦」、たゆまぬ読書熱、酒量などなど、城下町の東の端で繰り広げられる一人の囚人にまつわる人間ドラマを、手紙の内容そのものが、実に鮮やかに、どの解説よりも効果的に描いている。

第二部の考察も、興味深い。上士であるので江戸や都でいろいろな方に触れ影響されてきたと思われる武市だが、その手紙の相手が他国の武士ではなく、身内の女性である意味は大きい。方言の歴史だけに焦点を絞った研究なら、より体系的に整理され参考にもしやすかったかもしれないが、読者たちの好奇心をここまでそそることができなかったであろう。

なお、一見するより遥かに大きな労力が求められる土佐の言葉を交え

た候文の現代語訳に関しても、著者と協力者たちの労を称えたい。

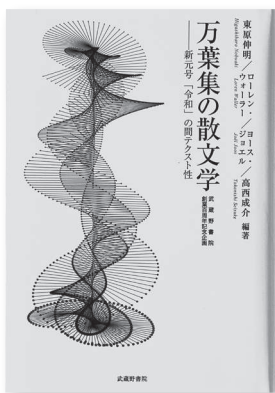
■特別賞

東原伸明／ローレン・ウォーラー／ヨース・ジョエル／高西成介 編著

『万葉集の散文学』

―新元号「令和」の間テクスト性―

(武蔵野書院 刊)



「出版文化の向上に寄与する」という点において特に奨励に値するもの―これが高知出版学術賞特別賞授与の基準となっている。今年度推薦された十二点の図書の中で、『万葉集の散文学』がこの条件を十二分に満たしているとみて、審査委員たちの意見が特別賞を授与することで一致した。(なお、この決定は、「要綱」に従い、本書の執筆・編集に携わった審査委員を審査プロセス(精読・討議)から外してなされたことを付け加えておく。)

本書は、二〇一九年(令和元年)

の秋に高知県立大学永国寺キャンパスで開催されたシンポジウムの記録(第一部)と、その発表者たちの論考(第二部)から構成されている。実にタイムリーな企画といえよう。また、文学研究の専門家を中心に新元号の典拠や解釈を論じ、政府発表や世間に流布する解釈に対して冷静で本格的な議論の成果を記録したところも高評に価する。「間テクスト性」など、高度な学術的概念をもう少し噛み砕いて紹介する余地があったのではという意見もあったが、たまには優しくたまには背伸びをさせる形で、学者による議論を一般読者に提供したことはまさに特別賞に相応しい、というのが審査委員たちの総意であった。

「令和」が発表された当時、元号の典拠が漢籍から国書に変わったことを国家主義的な観点から歓迎する雰囲気もあったように思えるが、実は、中国の大きな影響のもとにあった。万葉の時代の日本文化を多角的・国際的な視点でとらえ、元号の意義について理解することは、市民の教養として踏まえておくべき基本的な歴史認識である。

国内的視点においても、考えさせられる記述がある。たとえば、「ウメの真の自生といえるものは日本になく、また考古学的遺物としても：奈良時代の平城京跡や長屋王邸跡から大量に発見される。万葉時代はウ

メが渡来して間もない時期であったと考えられ、ウメを知るのは貴族など一部の階級に限られていたと考えてまちがいない」という、ウォーラー氏の指摘がある。万葉集はともかくも、当該の序文(『万葉集』の同伴旅人「梅花宴の序」)が時代の先端に関わった「限られた」人々による作品であったことをはっきりと示している。

前述したように、読者に背伸びを強いる個所もあるが、このシンポジウムには高校生も参加していて、総じて読者に語り掛けるような平易な表現が心がけられている。高校の古文・漢文程度の知識しか持たない人でも、ていねいに読めば理解できる。市民の教養に資するという期待が十分持てる。

ヨース ジョエル

一九七〇年、ベルギー国ゲント市生まれ。

二〇〇一年、ベルギーにあるルーヴエンカトリック大学で博士号を取得。二〇〇八年より高知在住。高知県立大学文化学部教授。第三十二回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本文化論、日本思想史。

高知よさこい情報交流館

十年の歩み

佐伯 泰典

先日「高知よさこい情報交流館の十年」と題して寄稿依頼を受けた。これは自分の仕事に点数をつけ、その成果に対し自分で採点して通知表を作成するような話だ。キツイところを突いてくるんだなあ!と思うつつ、しかし自分が関わったものでもあるし、この際あえて冷静に自分を見つめ直すのも良いかと思い総括することにして引き受けた。振り返ってみると二〇一三年（平成二十五年）四月二十七日（土）、ゴールデンウィーク初日が開業日であったと記憶している。

完成までの経緯について触れると、二〇一一年三月に高知県と高知市が「はりまや橋周辺から高知城までの東西軸エリア活性化プラン」を策定した。この計画では高知城やはりまや橋、よさこい祭り

や日曜市などをはじめとする九つの観光における地域資源を中核的資源として位置づけ、これを積極的に活用して事業展開を図っていくとされている。その一環として現在のはりまや橋商店街から高知市文化プラザかるぽーとまでの間に観光施設を設置しようと「高知よさこい情報交流館（以下…交流館）」が新設されたようである。なぜかその時、私に初代館長としての話が舞い込んで来たのである。よさこいの事については、会社員時代に充職として追手筋の櫓の上で審査員をしたぐらいで全く素人だったので大いに戸惑ったが、その昔、祖父から云われた言葉がふっと思い出された。「泰典! お前はいずれ将来仕事をする事になるが、何の為に仕事をするのか?」と祖父に問われた私は、す

ぐさま「お金を稼ぐためにする」と答えたところ、こっぴどく叱られた。祖父は「人は人様や社会の為に仕事や奉仕をするものである。成果としてお金は後から付いてくる!」と云った。その哲学的な言葉が何故か脳裏に蘇ってきたのだ。現在そんな昭和の古臭い話が一般的に受け入れられるとも思わないが、亡き祖父のその言葉を「自信が無く知らない事でも人様から乞われたならば先ずは飛び込んで一生懸命努力をしてみろ」、私はそう解釈し、結果として館長を引き受けた。

さて、交流館十年についてまず採点をしなければならぬ。一番目にこの十年でどれ位の人数が入館したのか。二番目に入館者を増やすための方策として展示会やイベントの企画立案をし、それを実

行したのか。三番目に交流館そのものがいつも輝きを放ち魅力ある施設であり続けるためには展示はもちろん、職員のお客様に対する接遇態度への指導評価もあろう。そして四番目に高知市からのミッションとして商店街と一体となつて町の活性化への一助等の努力。こういった部分が採点されるのではないかと思う。これらの点を主に自己評価する事にした。

まず一番目の入館者数だが、この十年間の入館者数は今年の三月三十一日現在で約四十六万九千人となっている。最高の年はオープン時の二〇一三年度で六万六千五百人。最低の年はコロナ蔓延下の二〇二一年度の一万八千人である。因みに昨年度は約三万二千人と徐々に入館者数も持ち直していると思われる。私が十年前にこの交流館の館長を引き受けた時、高知市の幹部職員から年間目標入館者数を二万人と想定していると聞かされていたので、入館者数においては何とかクリアできたと思っている。

二番目、館として「よさこい」の発信状況はうまくできているか。これは入館者促進のためにどう

いった企画等を実施しているのか、という事だと思う。この十年の企画展実施数は大小とりまぜた企画展やイベント等で約八十を実施した。これについては後ほど一つだけ披露させていただく。これら企画案については自分自身好き嫌いがどうしても出てきがちで立場上思ったりしては駄目なのであろう。大いに反省しているところでもある。そういったことで、これに関してはあまり良い点数は付けられないと思っている。

続いて三番目の評価だが、交流館の運営である。まずはより多くの方に来館をしていただき、お客様によさこいに関して多く触れていただき、理解を得て満足感を味わってもらわなければならな

い。入館から退館までに納得されて気持ちよくお帰りいただく、当然口コミで広がり、更にはリピーターとして再度来ていただくという好循環となるが、その逆でちよつとした不快な思いをした方はもう二度と来館されない。お客様は職員の態度や応対に対し敏感に感じ取るようで、大事なのはまず最初に笑顔での接遇が必要である。この事はあらゆる事に言えることだと思えるが、人と人とのコミュニケーションには明るさをもつて接し合う事が一番大切だと感じる。そしてこの一見簡単な事と思われがちな事こそがなかなか難しく、大きな悩みの一つであった。

最後の四番目だが、はりまや橋



商店街の活性化への一助である。はりまや橋商店街は木造のアーケードで全国でも一番数多くのイベント企画をやったということで経産省から表彰を受けた実績がある。従って交流館では、よさこいに関するイベントは商店街の皆さんと共に全て開催をした。今年度は交流館が開館してちょうど十年目の節目の年となる。さっそく私と入れ替わった新館長のもとで十周年記念イベントを四月二十九日（土）にはりまや橋商店街で予定している。この原稿を書いているのは三月であるが、多くの方がお越しくださって大いに盛り上がることを願っている。と、まあ、こんな十年だったと思う。やはり自分では点数をつけることは無理のようなので採点は読者の方に任せます。

最後に先ほどの企画展の話にちよつと戻りますが、昨年十二月一日に「よさこい生みの親」ともいわれている武政英策氏の没後四十年を迎えた。ちよつと武政氏の遺品が高知市に寄贈され、高知市文化振興課での保管が決まった。交流館ではその機会に展示と講演会を併せた企画展を開催した

が、その時の講演者で武政氏本人をよく知る方から、生前武政氏がよく語っていた言葉を紹介いただいた。「高知の観光の柱はいつまでも坂本龍馬でいいがかよ？一輪車では不安定でいずれ倒れる。よさこいがもう一つの車輪になって二輪車でいかないかん」と云っていたようである。今年はこの四月からNHKの朝ドラで牧野博士をモデルに「らんまん」が放送される。ぜひこれが三つ目の車輪となる事を願っている。それと同時に、二〇一九年度の商工会議所調べでは高知県でのよさこい祭りの経済波及効果が約九十五億円のままで停止しているが、どうか今年こそ第七十回よさこい祭りが正式な形で運営でき、待望の百億円達成ができる事も併願してやまない。

さえき たいすけ

一九四九年 窪川町生まれ。

札幌大学外国語学部露語学科卒業。

二〇一〇年にRKC高知放送を定年退職。二〇一三年に高知よさこい情報交流館館長に就任、今年三月末に同職を退任。

舞台美術というお仕事

水谷 雄司

『舞台美術家』という職業があります。ちよつと変わった職業で、人数はさほど多くありません。総人数は、はっきりとは断言できませんが、「一般社団法人日本舞台美術家協会」に入会されている会員数でも二百名には至りません。日本全国で、です。人数はさておき「ちよつと変わった職業」というのは、その定義にあります。『舞台美術家』が『舞台美術家』であるためにはどうあるべきなのでしょう？これは、はっきりしています。その人が『舞台美術家』であるためには、いま現在、舞台美術の仕事を受注しているか、これにつきます。いくら本人が「オレは舞台美術家だ！」と自意識していたとしても、現在オファーされている舞台美術の仕事がゼロであるとしたら、その人

は『自称 舞台美術家』になってしまう。これはボクの独自の考えではありません。この世界の大先輩であられる妹尾河童さまの常々おっしゃることです。『表現者』という言葉を使うと、画家とかミュージシャン、詩人とかダンサー、そして役者：みんな『表現者』です（売れているかそうでないかは関係ありません。別問題です）。では、『舞台美術家』はどうなのかというと、『舞台美術家』は『二次表現者』になります。『舞台美術家』が自発的に舞台を催すことは、まずありません。つまり、本人の自意識、自尊心はさておき、劇団とか事業団とかの他者さまからの発注を得て初めて二次表現としての『舞台美術』が成立し、そしてそれをなすのが『舞台美術家』なのです。

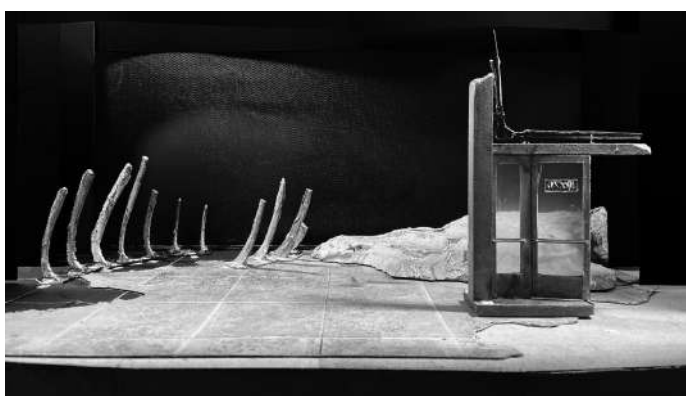
さて『二次表現者』である『舞台美術家』ですが、その仕事の内容はと言いますと、これがまた『制約の嵐』と言えます。年間に舞台美術全体の仕事の総数は、もちろん無限ではありません。限られています。その、限られた数の仕事を、なんとか食べていきたい舞台美術家が奪い合います。言葉が悪いですね、競争相手を蹴落とすわけではありません。営業ですね。営業といつても職種から言つて「ボクはいい仕事しますよ！今度はゼヒ、ボクをお試しください」などのいわゆる営業ではなく、できるだけいい仕事をして、できるだけたくさんの方々に見ていただく、これにつきます。仕事そのものが名刺であり、そして仕事そのものが営業です。

さて、いま我が国で舞台美術の収入だけで生活できている舞台美術家は、果たしてどれくらいいるとお思いでしょうか？舞台美術家としての収入、デザイン料だけで賄っている方は多くはありません。たいていは副業として専門学校か大学とかで講師をしたり、あるいは、グラフィックなど他のデザインの仕事をしています。なかなか賄い切れないのが実情です。舞台美術家に、相応の対価額を支払い得てこそ初めて『文化』が根付いたと言えるとは思いますが、歴史的には、既存の舞台美術家たちが、自分達の存在価値を社会的に知らしめたいために協会を発足させたのが昭和三十三年のことです。さほど古くはありませんが、それでも昨日今日のことはありません。現在、協会では、自分達の職業的存在価値を守るために規約を設けています。現今での協会の規約としては、一件のデザイン料の最低設定額を二十万円と定めています（表1参照）。さて、この規約、行き渡っているのかどうか、果たしてどう思われますか？二十万円…。美術総予算が五十万円の劇団があったとして、その劇団に美術費の四〇%のデザイン料

二十万円を請求するデザイナーを、果たして雇えましょうか。それでも社会的地位の保持のためにと、頑なに最低額を譲らなかつたとしたら、仕事は協会未入会のデザイナーにしか頼めません。ダンピングに余儀はありません。なかなかうまくいきません。勘違いなさらないでいただきたいのは、その二十万円のデザイン料が高価だと言っているわけではありません。むしろ正当だと考えます。問題はこの例で言うと、どちらかといえば美術総予算五十万円のほうにあって、できればもう少しなんとかならないか？ということです。舞台美術家の安定した収入の保障された社会は、まだまだと言えましよう。

ところで、舞台美術家の方にも決して原因がないとは言えませんが、充分とはいえない収入のため、来る仕事はまず受けます。よほどでない限り断りません。ヒマな時はまるつきりヒマなのに、忙しい時は何本も掛け持ちで受けてしまいます。もう、稽古場のハシゴです。何本も掛け持ちで仕事を受けてしまおうと、結果としてどうなるかと言えば、どうしても「愛」に偏り

ができてしまいます。これは、人間だから、どうしようもないことかもしれない。好きな仕事と、正直あまり好きとは言えない仕事とができてしまいます。お金はあまり関係ありません。むしろ、面白い仕事に限って予算のないのはよくあることです。稽古場に行くのが嬉しくて仕方のない仕事と、そうとは少し言い難い仕事、これができるだけ均して、「愛」の順位づけを無くそうと努めることが、



舞台『花咲く港』(夜須公民館マリンホール)の1/30縮尺舞台模型

優れた舞台美術家といえましょう。優れた舞台美術家に真に必要なのは、ハートです。プライドではありません。プライドは害です。一利なし、です。

舞台美術の制約の話、お金の制約の話だけになってしまいました。空間的な制約の話、時間的な制約の話が本当は面白いとは思いましたが、最初にきちんと言っておきたかったのが面白くなくてすみません：機会があればまたお話しします。

おまけのお話です。もし、金額的な制約の全くない予算のあり余る舞台の仕事があったとして、それが何をやってもオツケーなコンテナボラーな舞台であるとしたら、ボクの夢は、純金箔の雨を果てしなく降らせたい！そんな空間をやってみたい、観てみたいです。純金です。純金ですからその厚さは0.0001mmほどです。ふわふわと宙に浮き、漂い、なかなか落ちてはこない金箔の雨！です。観たいなあ：(この雨の回収率、あまりよくないでしょうね)

みずたに ゆうじ

一九五七年名古屋市長生まれ。
二〇二三年五月現在、舞台美術家。
武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業。一九九八年、オペラ『魔笛』の舞台美術で第二十五回伊藤嘉朝賞奨励賞を受賞。一九九九年、文化庁在外芸術家特別研修でオーストラリア国立劇場連盟背景画工房に留学。二〇一〇年、流山児★事務所「ユースタウン」で第三十七回伊藤嘉朝賞本賞を受賞。二〇一四年健康を害し、現在は高知でリハビリ中。第7回高知市民ミュージカルでは舞台美術を務める。

製作物の製作費	デザイン料(初演の目安・税抜)
100万円未満	20万円～
100万円～200万円	30万円～
200万円～300万円	40万円～
300万円～400万円	50万円～
400万円～500万円	60万円～
500万円～700万円	70万円～
700万円～1000万円	80万円～
1000万円以上	90万円～

表1 日本舞台美術家協会が定める「デザイン契約協会規定」における舞台美術(装置・衣裳)デザイン料(協会HPより)

感情がぐちゃぐちゃになっても 読むのをやめられないような小説が わたしは好きだ！

山中 由貴

いまにも動悸がしてくるような、手にかいた汗がいつまでも乾かないような、呼吸が浅くなるような、読んでいて身体機能まで狂ってしまふほどの本と出合った。

川上未映子さんの『黄色い家』だ。

惣菜店ではたらく伊藤花は、小さなニュース記事にある名前を見つめる。六十歳の「吉川黄美子」は、二十代女性を監禁・暴行した容疑で起訴され、裁判が行われていた。黄美子さんの名前は花に、封印していた二十年前の記憶を呼びさます。それは同時に、不安と恐れを連れてきた――。

冒頭から「？」マークがちかちか点滅したまま、物語は花と黄美子さんとの出会いの場面へと巻きもどる。十五歳の夏休み、二人暮

らしの母親のかわりにとつぜん黄美子さんと暮らすことになった花は、ふしぎな印象の黄美子さんに強く惹かれていく。ひと夏だけの黄美子さんとの生活は、それまでの母親との暮らしでは経験したことのないしあわせをあたえてくれた。夏休みが終わって黄美子さんがとつぜん去ってしまった日、花は冷蔵庫のなかに、黄美子さんが買いだめしてくれた食べ物やジュースがいっぱいに詰めこまれているのを発見する。

黄美子さんだった。今日、わたしを学校に送りだしたあとと黄美子さんがスーパーに行つて、これをぜんぶ買ったのだ。買ってきてくれたのだ。

たぶん黄美子さんは今日いなく

なることをなぜなのか決めていて、そのあとひとりになったわたしのお腹が減っても困らないように、ここに、こうやって、食べ物、ひとつひとつ、詰めてくれたのだ、食べ物、わたしに――そう思った瞬間、胸が詰まった。わたしは冷蔵庫の奥から漏れてくる薄い黄色の光を見つめながら、動くことができなかった。

冒頭でニュースになった黄美子さんと、花と夏休みをすごした黄美子さんとの印象のギャップに、わたしたちはまた、疑問をかかえることになる。そして、だからこそ物語に強く惹きこまれる。

数年後、自立のためにアルバイトをするようになった花は、母親の彼氏に必死で貯めてきたお金

を盗まれてしまう。そんなとき、偶然再会した黄美子さんについていくことを決め、家を飛び出すのだ……。

そこからの、花と黄美子さんのスナック開業の日々、そして蘭や桃子といった同世代の仲間と出会い、四人でひとつの家に住む共同生活のなかで、花はふたたび「お金を稼ぐこと」に一生懸命になつていくのだけれど――。

一九八〇年生まれの花とわたしはまったくの同い年。花が同じ年頃の高校生の少女たちを遠目にみながら、年齢をごまかしてスナックで働き、黄美子さんや仲間たちとの生活をつづけるためにのめり込んでいくある行為は、わたしにはとても衝撃だった。物語には一九九〇年代にわたしたちが経験したできごとや懐かしい空気がそのまま描かれている。ロックバンド「X JAPAN」のギターリスト、HIDEの死や、当時日本で大流行したクリスチャン・ラッセンの絵画や（わたしも子どものころ大丸かどこかに絵を観にいったっけ）、たまごっちや、ずっと居す

わって友だちとだべっていられた
マクドナルドや…。

同じ時代をすごしながら、生
まれた環境にいやおうなく左右され
道を踏み外していく花とわたしと
では、なにが違うというのだろう。
花はわたし。花の、冷蔵庫のなか
の黄色い光のようなごくあたりま
えのしあわせを求める真剣さは、
あまりにも切実にわたしの心をか
き乱してくる。

川上未映子さんの圧倒的筆力に
はことばもない。ときにやわらか
くノスタルジーに、ときに緊張感
を最高潮まで高めながら綴られる

文章に、深く深く没入してしま
う。花の、この暮らしを失いたくない
という願い。頭が痺れて麻痺して
いくような焦燥感。怒涛のように
脳内になだれこんでくる花の感情
が身体を満たしていく。
たとえばわたしはこんな一文が
好きだ。

黄美子さんは背中の中の真んなかあ
たりまである真っ黒で癖のある髪
を手で束ねてみせながら、わたし
の毛つて黒猫がまるまる一匹入っ
てもわかんないくらい多いで
しょ、と言って、楽しそうに笑っ

ていた。
またあるいはこんな文章に心臓
をばくばくさせる。

ねえお母さん、生きていくのつ
て難しくない？ すごくすごく難
しくない？ お金稼ぐのつて、稼
ぎつづけないといけないのつて、
お金がないとご飯も食べられなく
て家賃も払えなくて病院も行けな
くて水も飲めないのつて、すごく
すごく難しくない？ ねえお母さ
ん、わたしわかんないんだよ、ど
うしていいかわかんないの、いま
すごく難しいの、難しいん
だよ、どうしていいかわか
んないの、ねえお母さん聞
こえてる？

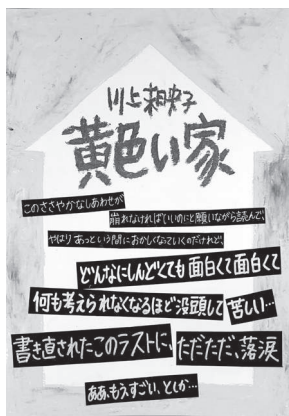
わたしだったかもしれない
花。だれもがそう思うだ
ろう。花の幸運の色である
黄色に、四人を守ってくれ
る家に、いくらあっても足
りないお金に、執着してい
く花。

追いつめられてよりリス
キーな道を選ぶしかなく
なっていく花は、わたしで



あり、あなただ。
物語がどんな結末を迎えるのか、
黄美子さんはほんとうはどんな人
だったのか。
わたしは、どうしたつてこの物
語を、愛おしいと思ってしまっ
た。

で、本を閉じたあと襲ってくる
激情に悶えるのがわたしは好き
なだけ、あなたとは？



やまなか ゆき

一九八〇年 高知生まれ。

TSUTAYA中万々店の書店員
なかしんぶん編集長としてTwitter
やっています。

好きな本について喋るときだけ饒舌に
なります。

「いのちの電話」とは

橋詰 益子



「いのちの電話」は、一九五三年に英国で始まり、全世界に組織を持つ、国際的な電話相談機関です。日本では全国に五十の電話相談センターがあり、およそ六千五百人の電話相談員がボランティアとして活躍しています。孤独の中にあつて、時には精神的な危機に直面し、助けと励ましを求めている一人ひとりと「電話」という手段で対話し、それを通じて再び生きる喜びと勇気を見出してもらえることを願い、日々活動しています。

私が「高知いのちの電話協会」に関わったのは、二〇〇七年一月からの養成講座を受け、その翌年一月から電話相談員になったのが始まりでした。相談員になって十五年が過ぎようとしています。二〇一五年十二月からは協会の事務局長を務めております。

「いのちの電話」のことは、相談員になる前から何となく知っていたように思います。新聞記事を

見て、「相談員をやってみたい」とすぐに応募しました。今までボランティア活動をほとんど行っていなかった私ですが、この相談員の活動に強く惹かれました。どうしてなのか。ボランティアということは自主性と主体性を持ち、活動自体は仕事でもないし、趣味とも違う。しかし「誰かの役に立ちたい」という気持ちはもともと人間に備わっているものだそうで、なかば本能的なことだとも聞いたことがあります。「いのちの電話」の相談員に応募してこられる方は、この気持ちを強くお持ちの方が多いように思います。相談員になれる方は、比較的中高年の方が多いいのですが、最近は二十代の方も関心を持ってくださっていて、次世代いや次々世代でしょうか、頼もしく感じています。

「人の話を聴く」ということは、そう簡単なことではありません。人は誰かに「分かってほしい」という気持ちを持っています。そんな時、「分かり合える」人間関係があれば救われるでしょうが、身近な関係の人には話せない場合もあります。最近では、電話が苦手な若者も増えていると聞きますが、「電話」の良さは顔が見えない、どこかの誰かもわからない、どこからでも掛けられる、何者にもなれること、携帯のかけ放題で通話料無料（かけ放題でもナビダイヤルは有料です）、等でしょうか。匿名の「相談者」と匿名の「相談員」が、縁あって繋がるのです。

「いのちの電話」は「一期一会」と言われています。次の約束もしないし、相談員は指名制でもありません。高知の場合は、九十二名の相談員がこの活動を支えています。みな一人ひとりが一点一点として支え、一面を成しているのです。「話す」ことは人間に備わったとても素晴らしい機能であり、誰かに話をして聴いてもらうことは、少し楽になることではないで



電話相談の様子

しょうか。その「少し」がとても大切で、すごく温もりを感じられたりします。それは双方に伝わる温もりであり、想いです。相談を通して相談員自身も考えさせられたり、自分を見つめ直すきっかけになります。相談員は、専門家ではないけれども、一年間の養成講座を受けて認定された人たちです。相談員を続けていく為には、月に一度の研修を受けながら活動していきます。ボランティアでありながら、結構ハードな活動だと思えますが、相談者に少しでも楽になつてほしい、寄りそうことができれば：という気持ちで活動しているのが私たちです。

■高知いのちの電話

【相談電話】

〇八八―八二四―六三〇〇

【相談時間】 九時～二十一時

（年末年始は十時～十八時）

はしづめ ますこ

一九六一年 高知県生まれ。

二〇一五年十二月より認定NPO法人「高知いのちの電話協会」事務局長。

「アンテナ」 咲子おめでどう

下尾
仁



文化高知No.220で「娘と挑んだ欽ちゃんの仮装大賞」と題し娘のことを書かせてもらった。その娘が二〇二三年三月に結婚披露宴をおこなった。三年前の秋に入籍はしていたのだが、やはりコロナのせいで延期になり、やっとの披露宴であった。会場は新郎が大阪ということで、大阪からも高知からも比較的行きやすい神戸であった。娘からは「衣装を借りているので当日持ってくる物は靴と涙を拭くためのハンカチ」と連絡が来ていたが、涙なんか流すこともないだろうと思いつつも、分かった、靴とタオルを持って行くよと連絡を返していた。

僕はバツイチで息子が小六、娘が小三の時から住まいは別々で日々の成長を見届けてきたわけではなかったが、元嫁の育て方が良かったのか二人とも本当にいい大人に育ってくれていた。披露宴当日は息子の車で神戸に向かった。息子とはいろんな話で盛り上がり、あつという間に神戸に到着。すると娘からLINEが入り、「ベルトも必要みたい」とのこと。しか

しもう神戸である。何とかなるだろうと、そのまま式場に向かった。式場はなんとも歴史を感じさせる佇まいで、スタッフの方に話を聞くと、昔の大富豪の別荘を式場にしたとのことであった。結婚式の時間もあり、着替えのために着衣室に行くと、モーニングのためにサスペンダーが入っていたのでベルトは必要なかった。娘の連絡はいったい何だったんだろう。着替えも終わり、ウエディングドレスを着た娘に会って初めて交わした言葉は「ベルト大丈夫だった?」「サスペンダーがあったき大丈夫だった」だった。ウエディングドレスを着た娘は本当にきれいで嬉しくもあり恥ぢずかしくもあり、何とも言えない感じになった。

いよいよ挙式が始まり、ドラマのように娘と僕が腕を組んで入場。そして新郎にバトンタッチ。式は人前結婚式で家族や友人などに証人になってもらうスタイル。代表の挨拶をした新郎の友人は緊張していたのであろう、一発目に「新郎の咲子さん」と紹介し、会場はプチざわざわ、娘が小さな声で「新

郎じゃないよ」と言うと友人は我に返り、すいませんと言い直し、会場は和やかな雰囲気になった。そして指輪の交換では娘が指輪を床に落とす始末。プチハプニングもあったが、花粉症対策のために持ってきていたポケットティッシュは涙でぐしゃぐしゃに濡れてしまった。

その後の披露宴も盛り上がり、今まで食べたことのないようなご馳走をいただいた。

お色直しの退席の時、「ここでサブライズ、新婦の兄である敦さんにエスコートをお願いします」と司会の方から声がかかった。ふだん物静かな息子は戸惑いながらも娘の元へ。司会の方から「お兄様から妹さんへお祝いの言葉を」と言われると、息子は少し間を空けて声を張り上げて「オレの自慢の妹、結婚おめでどう!!」と。その瞬間、子どもだった二人のことが走馬灯のように思い出され、涙があふれてきた。最後の娘の手紙でも涙腺崩壊。冗談なしに、本当にタオルを持つてくればよかったと後悔した。式が始まって約四時間、あつという間に時間は過ぎた。会場から車で十分ぐらいのホテルに宿泊することになっていた。酒の飲めない息子の運転で移動。新郎は二次会に、新婦(娘)は一歳になる子どももいるので二次会には参加せず、せっかくなので元嫁と息子、娘(と孫)と近くで食事しようかとなり、何十年ぶりかの四人(と孫)での食事も感慨深いものとなった。

次の日せっかく神戸に来たのだからと息子と二人で中華街に行き神戸を満喫して帰路についた。淡路島を半分ぐらい過ぎた時、娘から電話があり、ご祝儀袋をまとめた袋を預かっていないかと聞かれた。式当日、酔ってはいなかったがそんな記憶はないので預かっていないよと電話を切ったが、三十分ほどしてまた電話がかかってきた。どうも式場からホテルに移動の時に息子の車に乗せたかとも言っているので、パーキングを確認すると、それらしき白い袋が。すぐに娘に電話をかけると、電話口でもわかるぐらいにホッとした口調で、ご祝儀泥棒にあったかと思つたと言っていた。さあ、どうやってこのお金を渡すか、娘も高知に来る予定はないし、僕も息子も大阪に行く予定はない。しかたなく家に着いてからテレビ電話を繋ぎ、ご祝儀袋を開封し、合計金額を後日振り込むことにした。

最後にそんなオチもあり、濃厚な二日間になった。これを書いてる今も思い出しながらタオルを握りしめている。

本当におめでどう
自慢の娘 咲子

しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

3月の事業から

公益財団法人高知市文化振興事業団アーティストインレジデンス事業

尤嘉楽／原田甲亮二人展

「あなたの知らない鏡川-Mirage of KAGAMIGAWA-」

大阪芸術大学大学院で写真を学ぶ^⑥尤嘉楽と原田甲亮^⑦による、鏡川をテーマにした展覧会「あなたの知らない鏡川-Mirage of KAGAMIGAWA-」を三月四日（土）から三月十二日（日）まで薬工ミュージアムとミニシアター蛸蔵にて開催しました。

令和四年度、高知市文化プラザかるぽーとが改修工事のため休館となり、その期間を利用し、高知市文化振興事業団としては新しい試みとしてアーティストインレジデンス事業を行いました。アーティストインレジデンスとは招聘されたアーティストが一つの地域に一定期間滞在し、創作活動を行うこと、またその活動を支援する制度です。今回は、鏡川をテーマにした写真作品を制作・発表することで、私たちの身近にある鏡川の魅力を再認識してみようと企画しました。招聘アーティストである尤さんと原田さんは、令和四年九月から十二月にかけて延べ三十二日間高知に滞在し、地域の人々と交流を深めながら作品制作を行いました。

た。本展ではその完成した作品七十点を展示しました。

会場となった薬工ミュージアムでは原田さんの土佐和紙を使用した和紙プリント作品や額装作品、尤さんのドローンで空撮した写真を繋ぎ合わせて、一つの大きな川に見立てた作品などを展示しました。来場された方は緻密に計算された原田さんの作品と、ダイナミックで迫力のある尤さんの作品の対比も作品とともに楽しめました。そしてミニシアター蛸蔵では、原田さんによる約五分三十秒の映像作品を上映しました。この映像は同一アングルにて静止画を一定間隔で撮って並べるタイムラプス作品になっており、時間の経過とともに変化する鏡川はとても神秘的で、観た方から「とても幻想的で癒されました。観に来ることができて良かったです」と嬉しい感想もいただきました。

本展には高知市内はもちろん市外や県外から来場された方もおり、鏡川を知っている方にも知らない方にも作品をゆっ

くりと楽しんでいただけました。また、開催期間中は作家が在廊しており、来場された方と撮影技法や撮影場所の話題で盛り上がり、作家と来場者の距離が近い和やかな雰囲気の出展会となりました。

会場 薬工ミュージアム／ミニシアター蛸蔵

入場者数 二七四名



来場者と話す尤さん(左から2番目)と原田さん(右から2番目)



原田さんの映像作品

高知市文化振興事業団

第十一回高知の音楽活性化事業

金子三勇士ピアノリサイタル

十一回目となった高知の音楽活性化事業（通称…おんかつ）は、アーティストが数日間高知に滞在し、コンサートだけでなく様々な地域交流プログラムを行う企画です。今回は、ピアニストの金子三勇士さんに、三月八日（水）から十一日（土）の日程で高知市にお越しいただきました。

金子さんが四十七都道府県の中で、プライベートと仕事を含め唯一訪れたことがなかった未開の地が高知県だったそうで、今回の訪問を大変楽しみにしてくれていたようです。

コンサートの前に訪問した交流先は、高知学園短期大学幼児保育学科、児童養護施設子供の家、一ツ橋小学校、潮江小学校の四か所です。それぞれの訪問先で、金子さんがピアニストになるまでの過程や、可能な限り近くに集まってもらってのピアノ演奏、クイズ形式の自己紹介など、クラシックを身近に感じてもらえる要素が満載でした。

金子さんは、アウトリーチ活動（アーティストがホールや劇場を出て様々な場



所に文化・芸術を届けにいくこと）に力を入れていくピアニストの一人です。根底には、六歳から十六歳までをハンガリーで過ごし、尊敬するというハンガリーを代表するピアニストで作曲家のフランツ・リストの教えにあるようです。「二人でも多くの人に生演奏を聞いてほしい。そして、自分は、二十一世紀のフランツ・リストになりたい」と語ってくれました。その言葉どおり、金子さんは、二〇二二年には百二十七回のコンサートをして、そのうち三分の一の約四十回はアウトリーチでの公演であると教えてくれました。

コンサートでは、必ずフランツ・リストの楽曲を入れて、ハンガリーのことや偉大な作曲家のことを紹介するようにしているそうです。そして、プログラムのラストは、約二十五分の大作。ベートーヴェン「第九」より第四楽章にフランツ・リストが編曲を加え、それをさらに金子さんが、今日の会場の雰囲気を感じ取りアレンジを加えた、まさにここできか聴けない一曲を披露していただきました。



会場 高知県立美術館ホール
入場者数 三九七名

た。その後のアンコール曲演奏後、拍手がなりやまず、「今日はこれで終わります」と挨拶したほど、多くの聴衆を虜にしていました。

余談ですが…大のカレー好きとしても知られている金子さん、ホテルでの三日間の朝食、すべてトマトカレーに納豆・目玉焼き乗せで召し上がったそうです（すごく美味しいと気に入っていました）。



高知を撮る

第36回写真コンテスト入賞作品 潮干狩り (平成27年5月5日 土佐市宇佐天王州)

平成の始め頃よりアサリやマテ貝が減少し、潮干狩りが2015年中止となりました。家族で楽しんだ頃の思い出の写真です。

植田 和子

司馬遼太郎の『竜馬がゆく』は中学時代から何度も読み返した小説だが、特に感慨深いのが学生時代の読書体験だ。

大学時代の最初の二年間、東京生活に馴染めなかった。人口一千万を超える巨大都市に呑み込まれた感じがして居場所が見つからなかった。満員電車で押しつぶされそうになりながら大学に通い、殺風景なキャンパスを歩き、大教室でよくわからない講義を聞いていると自分は全く疎遠な世界にしていると感じた。どうしてこんなところへ来たのだろうかかと思った。自分の意志で来たはずなのに何か大きな力によって動かされているような気がした。大学へ行けば無味乾燥な受験勉強とは違つ、わくわくするような世界が待っていると勝手に期待していた反動かもしれない。

そんなとき『竜馬がゆく』を読み返した。読み終わったとき、不思議なことに東京と和歌山、学生生活に馴染んでいた。

あれは何だったのだろうか。波瀾万丈の物語に夢中になった中高時代とは異なる視点からこの小説を読んだ

竜馬体験



風俗歳時記

からだと思つ。竜馬の次のような言葉に感銘を受けた。「地球を動かしているのは思想ではなく経済だ。思想とは尊皇攘夷思想を指すが、その本質は『べきだ』という発想だ。世の中はこうあるべきだ、という思考。竜馬は『べきだ』と『地球』は、まったく別次元のもので、とあるときから悟る。地球が自転しているように、世の中は人間の思考からは独立した動きをしている。けれど、その運動法則を知れば、これを動かすことができるかもしれない、と道筋を探り始める。現代的に言えば、歴史の『他者性』を発見し、その仕組みを知ろうと懸命に努力する。そういう竜馬の『地球観』が私を救ってくれた。

『大学はわくわくする場所であるべきだ』と考えるのをやめた。わくわくしないのは当然だ。『他者』なのだから。けれど、その仕組みを知らなければ、深くかかわっていきけるかもしれない。そう気づくと、東京も大学も好奇心の対象になった。すると自分の居場所も見つかった。

今年に司馬遼太郎生誕百年。『竜馬がゆく』をまた読み返そうと思つ。(本の虫)

出演者募集

高知市文化プラザかるぼーと リニューアルオープン記念事業

第7回高知市民ミュージカル

GIFT OF LIFE

ふかかな植物園



誰でも参加オッケー！
みんなでつくる
ミュージカル！

オーディションワークショップ

5月6日(土)

18:00~20:30

5月7日(日)

13:30~16:00

【お問い合わせ】公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071

風伯

サーカスの華

リ返し夜空に橋円を描く。
昔のサーカスは曲馬と呼ばれた。馬上の曲芸がサーカスの華だった。土佐ではもともと昔、徳川の時代に曲馬が伝わる。この曲馬は朝鮮流の武芸で要馬術と呼ばれた。吊り上げた木馬に乗り、サーカスみたいな猛稽古をする。実馬の試合では、各組二十騎程度に分かれ、稽古用の槍、竹刀を振る、馬上の取っ組

あれはUFOか。いや、あれは夜の雲間を照らすサーチライト。戦争が始まったのか。いや、あれはサーカスのテントが放つ平和の光。
この街にはずいぶん昔から競馬場があって、ある日広い駐車場にサーカスがやってきた。一日の興業がはねても、一晚中テントのイルミネーションはキラキラしているし、サーチライトが二つ、緑

み合いまでやる大掛かりな騎馬戦だった。観衆が詰めかけた。戦のない時代に輝く馬たちがいた。
今回のサーカスに馬が出ないのわかってた。でも夜空を飛ぶ光に魅入られて、明暗のある夜のサーカスに行ってみたくなった。最終日近く、わざわざ雨のなか夜の部を選んで行く。
明滅する巨大テントに遭遇。競馬場に咲いたサーカスの華。それは空中ブランコだった。ああ、これは異次元の宇宙のできごとではないか。現代のサーカスの華はUFOの飛行を超えた。
終演のテント前に出る。サーチライトは懸命に光を放つが、現世は冷たい夜の雨が降っている。幻か、いや、確かに馬がいる。ほの暗い電灯の下、運搬式の小さなメリーゴーランドに、子らの歓声や音楽を響かすこともなく、回ることをさえない、蒼ざめた馬たちが。

(三)

高知市文化プラザかるぼーと
リニューアルオープン記念事業

SIENATM WIND ORCHESTRA

高知公演

ブラスの祭典
シエナBESTコンサート

開催日時

7月1日(土)

18:00 開場 18:30 開演

会場

高知市文化プラザ
かるぼーと大ホール

入場料

2階指定席 4,000円

一般自由席 3,000円

高校生以下自由席 2,000円

(当日券は+500円)

未就学児の入場はご遠慮ください

日本を代表するウインド・オーケストラが大編成で、待望の高知公演!!

映画音楽からクラシック、吹奏楽オリジナル作品までを詰め込んだ、リニューアルに相応しい贅沢なプログラムを今注目を集める田中祐子の指揮でお届けします。

主催・お問い合わせ

公益財団法人高知市文化振興事業団

☎088-883-5071

今号の表紙

母の日

又川 優衣

5月で一番最初に思い浮かんだのが母の日でした。感謝を表現する時は手紙と花かなと思ったのでこの二つを選びました。少し影や透明度を下げ、淡く柔らかな感じを表現し色も少なく落ち着いた着きのあるものに仕上げました。

(またがわ ゆい／

龍馬デザイン・ビューティ専門学校2年)

第75回 アンデパンダン

高知市展

絵画(洋画)/日本画/書道/先端美術(立体)/彫刻/陶芸/
工芸/写真/ペン字/デザイン/北見市美術交流作品

会期

2023年5月27日[土] ▶ 6月11日[日]

午前9時 ▶ 午後6時 [月曜休館]

初日 午前10時開場 最終日 午後4時終了

会場

高知市文化プラザかるぽーと
7階 市民ギャラリー

入場料 ▶ 前売 300円 [当日 400円]

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者と
その介護者1名、及び65歳以上と高校生以下は無料

販売所 かるぽーとミュージアムショップ 088-883-5052
販売所 高知県立美術館ミュージアムショップ 088-866-7653

作品搬入

日時 ▶ 5月21日[日]・22日[月]
午前10時～午後5時

場所 ▶ 高知市文化プラザかるぽーと
7階市民ギャラリー

出品料 ▶ 1部門につき一般 1,500円・学生 1,000円

第75回高知市文化祭

■主催：高知市展代表委員会・公益財団法人高知市文化振興事業団・高知市 ■お問い合わせ：公益財団法人高知市文化振興事業団 088-883-5071
■共催：高知新聞社・NHK 高知放送局・RKC 高知放送・KUTV テレビ高知・KSS さんさんテレビ

ご来場の際はお願い 感染症予防にご協力をお願いします。

デザイン：佐竹萌花

